教員志望学生に求められる教員としての資質能力の育成に関する研究
― 教職総合演習での「野菜づくり」を通して ―

瀬川　武美
湯藤　定宗

はじめに

教育者としての資質能力には専門知識、指導技術、評価技法といった「教育の専門家としての確かな力量」に加えて、「教職に対する強い情熱」や「総合的な人間力」などの広い意味での心理的な側面[1]（以下、心理的な面と称す）がある[2]。例えば、子どもの個性を尊重する・子どもが伸びることを手助けする・子どもの反応を待つ・子どもの目線に立つ・子どもをよく観察する・子どもに愛情を注ぐ、といったものや、教員自身の自己認識力・自己統制力・反省的思考など他にも列挙すると際限がない。教員養成課程では教育者としての資質能力について当然学習するが、こうした心理的な面は座学だけで身につけられるほど容易なものではない。専門知識、指導技術、評価技法などは、座学や演習である程度学習できるが、心理的な面については、実際に体験しないと自覚的に学習されない面が多分にある。

そこで、教育実習前に、こうした心理的な側面の涵養を目的の一つとして、「教職総合演習」を受講している３年生に、2006年５月から2007年１月まで「野菜づくり」を体験させることにした。実際の子どもを対象にするのではなく、期間も限られているが、“命あるもの”を自ら育てる、という営みを通して、「野菜づくり」に人を育てる、教育する、という行為を重ね合わせて、学生たちは座学では学べない多くのこと、とりわけ心理的な面において「気づき」があり、変容するであろうと考えて、試行した。

ところで、先行研究についてであるが、教員養成課程において、自然体験や地域との交流などを教職に就くうえでの基礎的経験にさせようとする実践はいくつか行われている[3]。しかしながら、「野菜づくり」を授業の一環として取り入れ、教員としての資質能力の育成に焦点を当てた実践研究は、管見の限り見られない。

なお、本実践に関する一部は、既に平成18年度学内共同研究において、野菜そのものについての認識の仕方や日常生活の変化などに視点をおいて、学生がどのような変容をとげたかを報告した[4]。変容の主たる内容は、「協調性」「自然との共生」「感謝の気持ち」「思いやりの気持ち」など、子どもたちに広い意味での「道徳」を伝えていかねばならない立場の教員として当然身に付けておかねばならない心情であった。

本稿は、もう一歩進んで、学生たちが教員としての立場を自覚した上で「野菜づくり」を振

り返ったとき、どのような「気づき」や「学び」が生じたかを明らかにして、教員養成教育の充実に資することを目的とするものである。

以下、「野菜づくり」の実際を紹介し、次に「気づき」や「学び」の内容とその教育的意味を分析し、最後に、実践を振り返りながら今日的課題との関係において本実践の意味を考察する。

1.「野菜づくり」の実際

使用した畑は200m²以上のものであるが、これは、近隣において兼業で農業を営まれているＴ氏に依頼をして無償貸与されたものである。

担当教員２名は、「野菜づくり」に十分精通していたわけではないことから、畑の提供者であるＴ氏の厚意で指導・協力を得ることになった。なお、無農薬・低農薬栽培を行うこともＴ氏の了承を得た。

以下に「野菜づくり」の作業過程の概略を述べる。

■　時期や天候等の事情で、５月３日に畝づくりを行った。Ｔ氏が耕耘機で土を耕した後に、石灰を撒き、鋤や鍬で畝を整備した。ゴールデンウィークであったにもかかわらず受講生14名中３名の学生が参加した。

■　５月10日、「教職総合演習」の授業時間（90分）に全員で苗植えを行った。苗は、学生の希望に基づき、トマト、キュウリ、ナスビ、かぼちゃ、ピーマン、ほうれん草、赤紫蘇などであった。学生は事前に苗を購入し、植える直前まで自宅で水遣りなどをして管理した。苗を植えるときはＴ氏の指導を受けながら、ポットから苗を取り出して植えていった。学生たちは、後々の根の張り具合を想定して等間隔で植えていくことや、苗の周りに水をためる水遣りの方法などをＴ氏から教わった。

　この日初めて畑に入る学生たちの服装や履物は、普段の状態と変わらず、畑作業には不適切な姿が見られた。

■　５月10日以降９月までは、朝10時までと夕刻の水遣りや草引きを、当番制で毎日行うことになった。学生には、最低週２回は畑に足を運び、自分の植えた種類の野菜だけではなく、全野菜への水遣りと畑全部の草取り、そして、教員が用意した「野菜栽培個人記録」（ポートフォリオ）用紙に作業内容や観察したことなどを記入することを課した。

　学生は、５月中旬頃から「野菜づくり」の大変さを感じ始める。と同時に野菜に愛着を抱きだす。「かわいそう」「うれしそう」といった感情移入が「野菜栽培個人記録」に見られる。

■　５月31日、「教職総合演習」の授業時間に、キュウリのネット張りやトマトやナスビ、ピーマナンなどの支柱立てなどをＴ氏の指導で行った。この頃になると学生は軍手をはめ、長靴や運動靴を履くようになっていた。

この時期までに提出された「野菜栽培個人記録」を見ると、写真や写生は記載されていたが、野菜の形、大きさ、色、匂い、感触など五感を通した具体的な記述が乏しかったので、観察力を高めるために、これらの点についても記述するように助言をした。また、野菜に「声」をかけること（ある学生は既に行っていた）や土の観察などもするように勧めた。

■　6月、収穫が始まる。収穫可能な野菜の大きさをT氏に教わる。学生たちは、畑に行き、収穫できる大きさに成長している野菜を適宜採取するようになる。また、この頃に「間引き」や、収穫した後にも肥料を遣ることなどをT氏から教わる。またナスビとキュウリの畝に、乾燥や雑草対策のために藁を敷くこともT氏から教わった。

この頃の「野菜栽培個人記録」には次のような記述が見られる。

・「大きくなれよ」「いっぱい水あげるからなー」といった「声かけ」

・野菜が毎日何らかの変化をしているので、おもしろいから水やりの当番ではなくても見に行きたい。

・（キュウリやナスビの葉の色や形を見て弱っていると気づき、Tさんの畑の元気なキュウリやナスビと比較して）かわいそうで、こまめに畑に行かないといけないと痛感しました。

・ナスビは根を虫に食べられ、力を吸収されていました。気づくのが遅くなってごめんとあやまったけれど、本当に申し訳ないし、かわいそう・・・。私たちはしんどかったりするとすぐに言葉にして伝えることができるし、病院もあるし、薬も一人でのめるけれど、私たちが育てている野菜たちは、私たちが気づかない限り、一人でがんばるか、一人で死んでいくしかないんだとあらためて実感しました。

・誰かが水やりをしてくれているみたいだった。当番でない日の水やりをしてくれるなんて、私もがんばらなければならいと思いました。

・食べ物が一つできるのに、こんなに手間と時間がかかっているとわかると、粗末にできないと感じた。

■　7月、ほとんどの野菜の収穫が終了する。

8月中旬ごろまで、夏季休暇中ではあるが、当番制で、少し残っている野菜の世話と収穫を行った。

7・8月は、猛暑のために、水遣りと雑草の処理は学生にとって苦行であったことは想像に難くない。しかし一方で喜びを見出してもいる。「野菜栽培個人記録」に次のような記述が見られる。

・雑草と蚊と暑さとの戦い、30分で敗れました。「雨降ってほしい！！」と心底願いました。

・雑草が大変だなぁーと思わずため息がでました。

・植え付けをしてから2ケ月しか経っていないが、野菜とかかわってきて、その中で自分の気持ちも野菜とともにすくなからず成長（たぶん）してきたように感じた。
・望まれて大きくなった野菜を大切にたべるぞ！！
・家でナスビをてんぷらにして食べた。とても甘くて感激した。これに自分の手もくわえられていると思うと嬉しい。

■　9月1日、2日、12日、21日に、これまで栽培した野菜づくりの後始末と、冬野菜栽培のための環境整備を行った。野菜の成長に合わせなければならないので、夏季休暇中ではあったが、この時期を選択した。学生にはボランティアで参加してもらった。毎回3名から6名程度の参加があった。この4回の作業で、大根の種まきと白菜の植え付けを行った。T氏から、種にかぶせる土の量や白菜を植え込む深さ、植える位置・間隔などの指導を受けながら一連の作業を行った。

夏野菜は担当を決めず全員で育てたが、冬野菜は各自が責任を持って育てることにした。担当する野菜は、白菜2個と大根4本である。

学生には夏野菜の栽培時と同様、後期開講時から週2回畑に行き、水遣りや草引きをし、担当する野菜の世話と収穫をして、「野菜栽培個人記録」を記入することを課した。

特に植え付け当初は、虫が葉っぱを食い荒らすため、こまめな虫の除去作業が不可欠であった。春先は虫を見つけると逃げていた学生ですら、虫を葉っぱから追い払っていた。白菜には、適当な時期に葉っぱが広がらずうまく巻き込むように藁でくくる作業を行った。

1月で冬野菜の収穫は終了した。

冬野菜に関する「野菜栽培個人記録」には次のような記述が見られる。

・分担制になったのでおもしろそう。
・学祭で野菜を販売したらおもしろいな。
・赤ちゃんの成長を見ている感じがした。
・大きくなった白菜をみて思うのは、春から夏にかけて、育つ野菜たちとは違い、手のかからない子だということだ。一時、病気になったが、それ以来、元気にここまで育った。同じ野菜と思っていても、種類ごとにまたその種類の中でも一つひとつ違うように育つ。まさに“世界に一つだけの花”の歌詞みたいだと思った。
・皆、野菜をもって帰りだした、畑が空いてきた。今日天気がどんよりしていることもあって、その畑をみて、なんだか寂しい気分になった。

最後に、全体の作業を通してのわれわれ教員のスタンスを述べておく。「野菜づくり」は学生が主体とならなければ学習効果は上がらないので、教員やT氏の作業はできるだけ控えるようにした。ただ、野菜の生育や土の状態などは教員やT氏が随時観察し、必要に応じて学生に情

報を伝え、対応の指示をした。なにしろ自然相手のことなので、授業時間外の作業が多くなる。学生の対応が困難なときは教員やＴ氏が援助する、という形をとった。

なお、学生たちの作業過程、野菜に対するまなざしや認識が徐々に変化していった様子などは「野菜栽培個人記録」に記載されている。資料に事例の一部を添付したので参照されたい。

２．学生の「気づき」や「学び」とその教育的意味

「野菜づくり」の経験から学生たちは、教員の資質能力として何が求められると感じ取ったのか。これについては、年間の「野菜づくり」終了後にレポートさせた「野菜づくりを通した理想の教師像に関する考察」[5]（以下、レポートと称す）から抜粋する。このレポートには、野菜を子どもに、野菜の栽培を子育てや教育活動に重ね合わせることで考えた学生たちの理想の教師像や教育活動、さらには自己分析などが書かれている。「野菜づくり」の作業が終わってからしばらく時が経ち、課題について考察するために、改めて野菜づくりの過程をポートフォリオから振り返り、省察したものであるので、一過性の感情的なものではなく確かな認識によるものであると思われる。

レポートは3,600字から4,800字程度の文章から構成されている。14名のレポートから教員の資質能力における心理的な側面に関連すると思われる「気づき」や「学び」を抜粋し、内容別に分類した。その結果を表１に示す。表記された内容は、できるだけ学生の言葉に即しながら筆者がまとめたものである。ただし、各レポートに同様の文言があった場合は一つとしてカウントした。

表１　教員の資質能力に関連する「気づき」や「学び」

自己本位にならないこと（自分の都合を優先しないこと）	14
個性の発見、理解、尊重と個への対応の大切さ	13
様々な人との協力の大切さ	13
学生同士の共同作業の大切さ	5
教員同士や教員と地域や家族の人との協力	8
「待つ」ことの大切さ	8
基礎・土台（教師としての知識や人間としての魅力）の形成が重要	8
感謝の気持ちを持ち伝えること	8
自分たちの作った野菜に愛着がわいてきた	7
成長できる環境づくり（手助け）の大切さ	7
子どもの変化に気付き適切に対応できること	6
子どもを本気で愛すること	6
コミュニケーションや愛情表現をすること（ほめることも含む）	6
すべての子どもに平等に接すること（クラス全体を見ることも含む）	5

必要なことだけ教えること	5
一人の人間としての在り様を考えさせられた	4
善行は隠れて行うこと（損得を考えない、見返りを求めない）	3
命の尊さ、大切さ	3
子どもと感動を共有すること	3
教師のパワーは子どもに与えるとともに子どもからももらう	3
最後まで責任を持つこと	3
苦労したことは結果に表れる	2
雑草のように強い気力が必要	2
自然の素晴らしさ、ありがたさを感じた	2

その他

- 一つの野菜からいろいろな事を教えてもらった気がする
- 新しいことに挑戦することはとても勇気のいることだが、素晴らしいことだと気がついた
- 野菜は生徒に置き換えられるということは大切な収穫だった
- これからの人生と子育てに重要なことを学んだ
- 自然と子育てとはこんなことだろうなと思った
- 子どもたちが疑問に思い、もっと知りたいと思える授業や子どもとの接し方をしなければいけないと思った
- 勉強だけでなく、いろんな経験を通して、豊かな人間性を持つ生徒が育つように支援したいと思う
- 自分をみつめなおす機会にもなった
- 自分が成長するきっかけになった
- 「間引き」から、全ての事に力を入れるのではなく、目標を一つに決めてやるべき、と言われている気がした。
- どの子どもにも成長の実感がある教育を目指して、私自身も勉強しつづけたいと思った
- 自分でも気づかないうちに、生徒の成長を見守り、成長を喜びあえる教師になりたいと思うようになった
- 他のクラスのやり方も見て、良い方法なら取り入れるということをしてもいいかもしれない
- 教師は言動を慎重にしなければならない
- 教師は生徒の見本になる必要がある
- 一定の距離をおき、生徒・クラスの状況を把握すること
- 人の気持ちを「考えることができる」のではなく、日を追うごとに「自然と考えるようになってしまっている」という感覚に変わっていったので驚いた
- 時間は勝手に過ぎていくものではなく、自分でつくっていくものだと思った
- 学ぶということに貪欲でなければいけない
- 健康であってこそ、人に優しくできる。健康であれば何でも乗り切れる、ということを学んだ
- 体調、心の調子を管理することが大切（心の調子が崩れているときは野菜づくりの作業も億劫になることを身をもって体感した）

「気づき」や「学び」の概要は、表１が示すとおり上位３位とそれ以下の差が歴然としているが、いずれも意味のある内容である。それぞれ検討したいところであるが、ここでは、ほぼ全員に共通する「気づき」や「学び」と受け止められる記述の中で、特に多かった三つを取り上げ、その教育的意味について考察する。

①「自己本位にならないこと」について

「野菜づくり」は、「１．野菜づくりの実際」で記したように授業時間外の作業が多い。学生たちは授業の合間をぬったり、アルバイトの時間を調整したりして、野菜の管理・育成をしなければならなかった。天候や体調によっては畑に行きたくない時もある。しかし、行かなければ野菜は死んでしまう。自分の都合で久しぶりに畑に行き、枯れたり、虫に食われたりしている野菜を目の当たりにして、赤ん坊と一緒で、野菜は言葉で意志を伝えられないし、自分で栄養を取ることや危険から身を守ることもできない、ということがわかってから、自分の都合を優先してはいけないことを学生たちは学んだのである。

「自己本位にならないこと」に関しては、自明のことではあるが、人間の有り様として探求すべき課題である。そして「教育は教師次第」と言われるように、教員は、児童生徒の学習環境のなかで最も重要なファクターである。したがって、その教員の人となりが極めて重要な意味をもつ。その際、「自己本位にならないこと」は、学校教育活動、及び学校組織において大きな教育的意味を持つ。その理由の一つは、学校という場の主体は子どもであり、教員や学校は子どもを育成するために存在するということである。二つ目の理由は、学校の運営は組織的にかつ教員間の協力によって円滑に行われる必要があることから、学校組織の一構成員として、他の教職員と協働して職務遂行にあたることが求められており、そういった意味において「自己本位にならない」ことは最も必要な資質能力の一つとして掲げることができる。そして、この「気づき」を学生全員が自ら自覚した教育的意味は非常に大きいと考える。

②「個性の発見、理解、尊重と個への対応の大切さ」について

野菜といっても多種多様な種類があること、また、同種類の野菜でも一つとして同じ顔をしたものはない、一本の茎になっている野菜もそれぞれ皆異なった顔形をしている、そして、野菜によって栽培の時期や育て方が異なる、などを多くの学生が実感したといえる。このことを如実に語っているレポートの一部を次に紹介する。

> 畑を始めたころ、かぼちゃの成長がほかの野菜よりも早くて、畑に行くごとに葉が目に見えて分かるくらいに、だんだんとツルを伸ばしていった。そのときに感じたのが、気づかないところでも、大きいにせよ、小さいにせよ、日々変化しているということだ。その成長過程の変化はいいものばかりではなく、悪いときもある。その中で大きい問題もあるが、気づかないような小さな問題もある。実際、気づけないままのほうが多いの

ではないだろうか。だから、その微妙な変化にも気づけるように、常に一つひとつに目を向けていられることが必要だと感じた。つまり、生徒の変化にすばやく気づくことが、問題を早いうちに解決できるから重要だと思う。また、悪いときだけでなく、いい変化もそうである。その変化に気づいて、ほめてあげたり、一緒に喜んだりできる教師は素敵だと思うし、生徒も自分の変化に自分から言わなくても気づいてくれるのは嬉しいものだ。たとえば、誰にも相談できず一人で悩んでいるときに、先生の「どうした」とか「最近どう」とか、その一言でさえ貴重である。だから、私は水やり当番ではなくても、「常に気にかけることが大切だ」と気づいて以来、行けるときに畑へは行くようにした。

その成長過程で、水をやったり、温度を暖かく保つためにビニールをかぶせたり、ツルが伸びて、そのツルが伸ばしやすいように網を張ったり、成長に合わせてさまざまなことをしてきた。野菜の種類や同じ種類でもその苗ごとに育ち方が違うし、できた野菜も同じ形のものはなく、それぞれに大きさも異なっていて、それぞれに個性を出しながら、育っていた。私たちは、その成長に合ったやり方で手を加えてあげることで、育ちやすい環境を作ってあげることが必要だと思う。しかし、その手の加え方でも成長にあった方法をしてあげなくては、うまく育ってくれない。同じ野菜はないから、それぞれの個性を理解し、尊重しながら、それに対応できなくてはいけないと思う。たくさんいるからといって、すべてに同じ対応をしていては、一人ひとりの個性は育たない。難しいことだが、それぞれの性格や特徴、長所を伸ばしたり、どんな可能性をもっているかわからないので、新しい可能性を見つけたり、生徒自身に気づかせてあげるように、一人ひとりを理解することが大切である。そこで、注意したいのはほかの生徒より優れているからといって、「差別」するのとは違うということである。一人だけを特別扱いをするのではなく、「平等」に接することが大切である。（M．A．）

現行学習指導要領への改訂の基礎となった、1998（平成10）年7月の教育課程審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」において、「３．ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実する」とある。野菜づくりを通して、「個性」といっても実に多様であることに学生が自覚したことの意味は大きい。

また、すべての子どもの個性を生かすためには、環境づくりや個々の変化への適切な対応が必要である。そのためには、常に子どもをよく観察していなければならない。観察も特定の子どもに注目するのではなく、すべての子どもを対象にしなければならない。M．A．のレポートにあるように、「成長できる環境づくり（手助け）の大切さ」「子どもの変化に気付き適切に対応できること」「すべての子どもに平等に接すること（クラス全体を見ることも含む）」など

の気づきは「個性を生かす教育」の実現に不可欠の要素である。

「個性の尊重」「個性の伸張」、そして「平等に接する」ことが、重要なことであると同時に、実現することは容易でないことを実体験できたことの意味は大きい。

③「様々な人との協力の大切さ」について

この内容は表１にあるように、「学生同士の共同作業の大切さ」と「教員同士や教員と地域や家族の人との協力」がある。

学生たちは、毎日畑に行き作業をすることはとても負担の大きいことを自覚している。そのうえで、14名が当番制で協力しあうことによって野菜を育てあげることができた、という実感があったこと。そして、それぞれが観察した野菜の状態に関する情報やＴ氏から教わったことなどをクラスメイトに伝えたりして、情報の共有や連携をしながら野菜を育てるという目的を達成できたこと。こうした経験から、多くの人々が協力することの大切さを認識したのである。

Benesse教育研究開発センターが2002年に実施した「学習指導基本調査」では、協調性のある生徒が減少し、自己中心的な生徒が増えたと感じている中学教師が多い、とある[6]。これは、「野菜づくり」を行った学生たちの世代を対象として実施された調査である。現在に至るも全国的な傾向として、いわゆる「ジコチュー」現象が、社会一般に流布していることは否定できないように思われる。このような実情において、教員を志す学生たちが、協力することの大切さを実感したことの意味は大きい。

そして、この「気づき」が教育上意味のあることは、次の学生のレポートに語られている。

> 問題が起きたとき、一人で解決するほうがよいこともあるかもしれないが、一人ではどうしても解決できないこともあると思う。そんなとき、先生同士が生徒について情報が行き届いていると、困ったときに助けたり、助けられたりし合えると思う。畑作業をする際に、私たちにはＴさんがいたように、教師同士でもどうしても問題を乗り越えられないときには、専門家の力を借りることも必要だということも同時に学んだ。そうやってさまざまな人が協力し合うことで、生徒にとって過ごしやすい環境を整えることで、よりよく成長できるのではないかと考える。（Ｍ．Ａ．）

> 同じ授業を履修している仲間たちの助け合いがなければ、わたしは野菜作りを途中で放棄していたと思う。水遣りも野菜たちにとっては毎日必要なものだが、それを一人で行うには毎日20分ほどの水やり作業をしなければならないことになる。
>
> それを当番制にすることによって、１週間に一度20分の作業をするだけでよくなった。負担がとても軽くなった。また、成長の過程を仲間同士で話す時間はとても楽しく、自分だけの発見があるととてもうれしかった。そのように、喜びや苦しみを共有する仲

間がいるということが支えになり、つらい作業でもやりぬけた。教育現場では、校長、教頭、学年主任、同学年を担任する先生方、専門教科を担当してくださる先生方、そして保護者の連携が不可欠になるだろう。皆と手を取り合って、生徒を第一に考え、彼らにふさわしい学習環境を整える。協力をするということは重要だと思う。（Y．Y.）

生徒や親との人間関係やいじめや学級崩壊などの悩みを一人で抱え、ほかの教員に相談せずにうつになり、休職している教師がここ数年増える傾向がある、（中略）教師の人間関係の希薄さが問題なのではないかという感じをもつ。（中略）教育の問題は、職種や職場を同じとする教師がお互いに相談しあったり、情報を共有したりして解決していければ本望だと考える。人と協力することは、まず人とコミュニケーションを図ること、そして信頼関係をもつことで、できるのである。私たちは、野菜作りを始めてから、学生同士で畑や気候や野菜についてたくさん話した。支柱やネットをつけるときには試行錯誤しながらも、自分たちが協力してつけることができた。水やりも曜日ごとにそれぞれ当番を決めて行った。同じ環境で同じ活動をするもの同士、協力することは不可欠なのである。教師はそのことを生徒にぜひ伝えていってもらいたいと思う。（Y．A.）

Y．A．の言うように、「いじめ」「学級崩壊」「保護者との関係」などで疲弊している今日の学校現場では、教員間の情報の共有と協力は重要である。また、学習活動においては「総合的な学習の時間」における教科や学年を超えた横断的・総合的でダイナミックな展開が期待されている。創造的思考や課題解決力を育成するためのプロジェクト学習も今後進行していくであろう。これらにおいて展開される、子どもたち同士や子どもと教員との共同・協働の学びには、協力は不可欠である。

さらに、子どもたちの成長のために、学校と地域との連携による教育活動の展開が望まれている。この他にも、2005（平成17）年10月の中央教育審議会の答申「新しい時代の義務教育を創造する」において、教員の質の向上のために、「同僚同士のチームワークを重視」することもとりあげられている[7]。また、2008（平成20）年度から施行される新たな「学校教育法」により、「学校運営の効率化」を実現するために副校長、主幹教諭、指導教諭、という職が新設することが可能となったが、「責任あるマネジメント体制」を確立するためには、一層「協力」という言葉が意識される必要がある。このような状況において、学生たちが「協力」の必要性や意義を見出したことは意味深い。

ところで、学生が大切なものとしてあげた「協力」ということは、自己本位の人間にはできないし、見返りを求める心があってはできないことである。その意味で、①に取り上げた「自己本位にならない」ことや「善行は隠れて行うこと（損得を考えない、見返りを求めない）」と

いう心理的な面は「協力」と関連すると考える。自己主張をしたり、損得を考えたり、見返りを求めていては協力して一つのことを達成することはできない。時には見えないところで努力をしたり、作業をすることも必要である。

学生たちが協力することの大切さに気づいたことの理由の一つに、Ｔ氏が常に学生たちに代わって野菜の世話をしてくれていたことを知ったことがあげられる。無事に野菜を育成できたのもＴ氏の隠れた善行のお蔭である。そのことを一言も言わずに、終始淡々とわれわれに接したＴ氏から、学生たちは人としてのあり方も学んだのである。

３．考察

ところで、レポートには[8]、「野菜づくり」に関する当初の気持ちを記載している学生もいた。表２はそれを抜粋したものである。これによると、積極的な回答をした学生は、「やりたいと思った」学生１名だった。それ以外の当初の学生たちの気持ちとしては、教職課程の授業と「野菜づくり」の関係付けが出来なかったことや、「野菜づくり」と「教育」との共通点を見つけることなど出来るはずがないと思っていた、ことなどがレポートに記されている。「やりたい」と思った学生も、単純に「野菜づくり」をしたかっただけのようである。

表２　「野菜づくり」に関する初期感情

面倒だった、積極的ではなかった	5
興味本位だった	2
中学校の時に経験あり	1
小学校での鉢植え経験あり	1
やりたいと思った	1

ところが、実際に取り組んでみると、表１にあるように、野菜と関わる頻度が増え、変化や成長を見るにつけて、次第に野菜に愛着を覚え、育てる過程を通して様々な「気づき」や「学び」をしていった。

中には、野菜の栽培方法に関心を持つ者や、「間引き」や「うどんこ病」（かぼちゃがこれに罹った）について調べたりする者もあった。

そして、ある学生はレポートにこのように述べている。「野菜は私たちのやる気と責任感を敏感に察知しているように思う。このことから自分の役割や責任感が身についた」と。つまり、野菜は作り手の心を見通していて、それに合わせて姿・形を変化させていくのだ、ということである。裏を返せば、この学生は、野菜は作り手自身だということを悟ったと思われる。深い洞察力である。

このほかに、野菜づくりによって自己認識を深め、反省したり、成長したという学生や、子育てや人生について学んだ、という学生もいた。

「野菜づくり」は個々の学生にそれぞれ価値ある学びをもたらしたようである。だから、われわれの挑戦した「野菜づくり」に意味を見出し、「新しいことに挑戦することはとても勇気のいることだが、素晴らしいことだと気がついた」という感想がレポートされ、「野菜づくりを子どもたちに経験させたい」（７名）と、半数の学生がコメントを寄せている。

ところで、「野菜づくり」は理想的な教師像や教育活動のイメージを具体化することに役立ったようである（「理想の教師像が現実味をおびたものとなった」２名）が、実際への適応はどうであろうか。「教育実習後アンケート」（「野菜作りの経験は教育実習に役に立ちましたか」）[9]の回答から検討してみたいと思う。次の①から⑧は、14名中、７月までに実習を終了した11名の回答である。

①「友人」をテーマにした道徳の時間に、一人ひとりの個性を大切にしてほしいことを伝えるため、同じ野菜に思えても、育ちも形も味も同じものではなくて、人もそうだということを例として話した。

②一人ひとりの個性を理解しようと始めから心がまえが出来た。

③先生方を見ていても思ったことですが、本当に見返りを求めない、相手のことを考えた行動ができる人間性になりたいと思いました。私はできていたと言えませんが、気づけるようになっただけでも野菜づくりをしていて役に立ったと思いました。

④待つことの大切さ

⑤忍耐力

⑥次のレッスンの内容がトマトのことだったので、内容を深く考えることができた。

⑦言葉で言い表さなくても、理解していこうという意識をもてました。

⑧全ての生徒がなついてくれる訳ではないけれど、諦めず毎日接しているとうちとけてくれるようになった事。

これらの回答から、個性を理解したり尊重する心が意識されたことをはじめ、「野菜づくり」を通して芽生えた心理が、一過性のもので終わらずに、それぞれの形で根付いているように思われる。

「野菜づくり」を体験した全学生に共通する学びとして挙げられるのは、本稿の２に記した「自己本位にならないこと」「個性の発見、理解、尊重と個への対応の大切さ」「様々な人との協力の大切さ」であろう。これらは教育者の資質として備えておいてほしい肝要な心理である。これら以外にも表１に示すように、個々の学生が気づいた内容は、一つひとつに価値・意味のあるものであった。また、これらの「気づき」は、「新しい時代の義務教育を創造する」で明示された「あるべき教師像」の条件とされている「子どもに対する愛情や責任感」「子ども理解力」

「集団指導の力」「対人関係能力」「コミュニケーション能力」「教職員全体と同僚として協力していく」[10]ことや、これからの教員養成において、対人関係能力の育成も求められている[11]ことなどにも符号する。

自分の関わり方次第で生死が決まる「命」を相手に、約１年間、彼女たちにとっては苦行といえる農作業という「労働」を体験した結果の産物である。その「気づき」や「学び」は、自ら発見し、獲得した実践知・実感であるだけに、座学で、通り一遍の講義を聴くよりも、心に深く刻みこまれたであろう。

市場原理に基づく学校教育が行われようとしている学習環境のなかで、極端な表現をすれば、子どもたちは勝ち組になるために他者との協力を避け、自己中心的にならざるを得ない。自己中心は子どもたちだけではない、学校という機関自体にその傾向が見られる。2006年11月には、628の高校で必修科目の履修漏れ問題が発覚した[12]。入試に無関係の科目は必修でも履修させない、という学校ぐるみの不正行為である。これも自己中心という範疇でくることができる。「個性を生かす教育」がこのような市場原理に基づく教育現場で真に実現されるのかどうか、この点を疑問視する目も、「野菜づくり」の経験から育っていくことが期待される。

ところで、近年、学校教育や保育の実践において農業体験が教育・保育活動に組み込まれている新聞記事をよく見かける。最近では2007年６月１日に開園した北海道恵庭市の認定こども園「つくし幼児園」での実践がある。近郊の農地を借りて、子どもたちの手による種まきや水遣り、雑草取り、収穫などを行っている[13]。また、文部科学省は同年８月31日に、「文部科学省、農林水産省、総務省による連携推進事業　子ども農山漁村交流プロジェクト－120万人・自然の中での体験活動の推進－について」を発表した[14]。子どもたちに学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育み、その健やかな成長を支える教育活動として、小学校における農山漁村での長期宿泊体験活動を推進する、というものである。高度経済成長期以降の急激な都市化と情報化の波の中で、子どもの生活体験は貧困化し、人や自然との関わりの力が低下してきている。したがって、上記した交流プロジェクトの活動は、そういった子どもたちにいわゆる「人間力」を育成する取り組みとして、歓迎される。

このような体験学習の積極的な取り組みは、高橋の言うように、「人間形成空間（子どもと自然・他者・事物とのかかわり合い、相互作用の過程で織りなされてくる独特の意味空間）」[15]が衰弱している子どもたちに対して、今日の学校には「個性を有する子どもたちが、さまざまな他者との＜かかわり合い＞の中で、＜意味ある生＞を獲得し、自己実現してゆけるための学びを援助していくことが、求められてきている」[16]のである。それは知識注入、受験に偏向している「学校のパラダイム転換」への動きでもある。

このような教育状況にあって、教員養成課程の課題の一つは、児童生徒自身が自己実現可能な学びの援助ができる教員の養成にある。まして、衰弱した「人間形成空間」で育ってきたで

あろう学生たちを抱える教員養成課程では必須課題ともいえる。したがって、本実践において「自己本位にならないこと」「個性の発見、理解、尊重と個への対応の大切さ」「様々な人との協力の大切さ」を教員の資質能力として重要なものであると、多くの学生が「気づき」学んだことの意味は大きい。実感は本物となり、また、体験を通して学んだ者はその体験の機会を他者にも提供できると思うからである。

今回の実践における学生たちの「気づき」や「学び」から、地域住民との連携により「野菜づくり」という形で「人間形成空間」の場を実際に設け、そこでの実体験による教員に求められる資質能力の育成をするという教育方法は、学生のレポートの記述等に基づく限り、有効であると評価し得る。中央教育審議会の答申に、教職課程の質的水準の向上に関する基本的な考え方[17]の一つとして、

> 学部段階の教職課程が、教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせるものとなるために、大学自身の教職課程の改善・充実に向けた主体的な取り組みが重要。

であることが挙げられている。本学の「野菜づくり」はこの方針に即すものとして、さらに実施内容の見直しを行うとともにデータの収集に工夫を加え、より実証的な研究を進めていきたいと考える。

最後に、ご協力・ご指導をいただいたＴ氏に、本誌を借りて厚くお礼申しあげる。

註

1　大辞林（第三版）によれば、心理とは「行動に表れる心の動き」とある。本稿では、その意味で用いている。

2　中央教育審議会「新しい時代の義務教育を創造する」2005年

3　例えば、

①福島大学教育学部の「教育実践学実習」における食農教育を目的とした米作りや果樹栽培は、地域との交流によって、学生と地域が相互に育ち合うという意味を見出している。（鈴木庸裕「農の持つ教育力－農村地域とともに開く学びの場」『21世紀の日本を考える』2003年２月号）
http://www.nou-taiken.net/repo/teacher/teacher02-01.html[2007年８月23日アクセス]

②大分大学教育福祉科学部の教員養成課程では、子どもの行動や心理を理解し、実践的な指導力の基礎を身につけることを目的として、山林の手入れ、農業、介護、地域との生活文化交流など、学生の任意参加による３年間のフレンド・シップ事業が行われた。（軸丸勇士「教員養成学部における総合的学習の実施方法と効果」『日本科学教育学会研究会研究報告』15（３）、2000年）

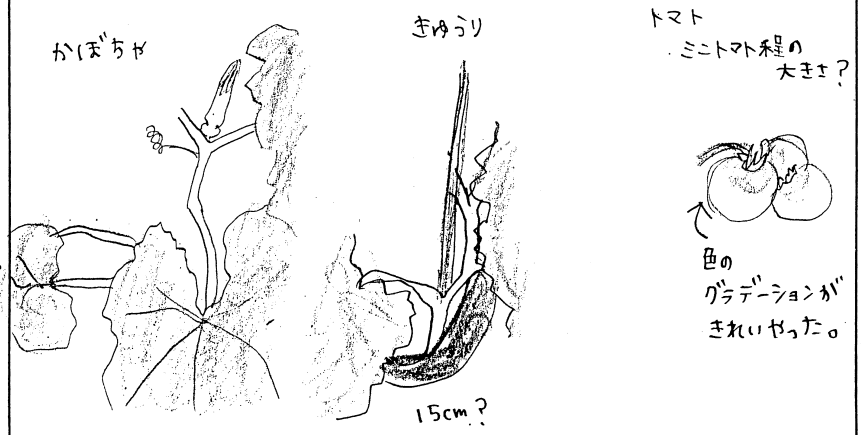
③上越教育大学では、達成感や自信を持たせたりすることを目的として、野菜栽培、草遊びと工作、キャンプ、天体観測など、希望者によって３泊５日の自然体験実習が行われた。（濁川明男、柴田好章「教員養成課程における体験実習の意義－自然体験実習の試みを通して－」『上越教育大学研究紀要』第18集、第１号、1998年）

④兵庫教育大学学校教育研究センターでは、豊かな人間性の形成と生きる力の育成を目指して行われる自然体験活動を指導する教員の養成方法を検討する目的で、「自然学校」施設等での青少年指導者等

に対するアンケート調査を行った。（別惣淳二、長澤憲保、上西一郎、一山秀樹「自然体験活動を通して新しい教員の資質能力形成をめざすカリキュラム開発」『教科教育学研究（兵庫教育大学）』21集、2003年）
4 瀬川武美、湯藤定宗、「体験学習を通しての教職学生の「学び」と「気づき」に関する実証的研究－教職総合演習における農業体験を通して－」『帝塚山学院大学共同研究報告書』2007年
5 瀬川武美、湯藤定宗編「2006年度帝塚山学院大学文学部教職課程履修生「教職総合演習」研究録～野菜づくりを通した理想の教師像に関する考察～」2007年に集録
6 http://benesse.jp/berd/center/open/chu/view21/2005/04/c01toku_02.html [2007 年9月11日アクセス]
7 中央教育審議会、前掲書、2005年
8 瀬川武美、湯藤定宗編、前掲書、2007年
9 教育実習後アンケート（無記名）　2007年 6 月27日実施
10 中央教育審議会、前掲書、2005年
11 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」2006年
12 朝日新聞、2006年11月12日、3面
13 日本教育新聞、2007年8月20日、6面
14 「文部科学省、農林水産省、総務省による連携推進事業　子ども農山漁村交流プロジェクト－120万人・自然の中での体験活動の推進－について」文部科学省初等中等教育局児童生徒課、http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/08/0709405.htm [2007年9月10日アクセス]
15 高橋　勝『学校のパラダイム転換』川島書店、1999年、169頁
16 高橋　勝、同上書、227頁
17 中央教育審議会、前掲書、2006年

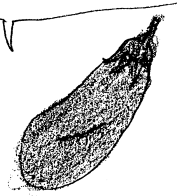
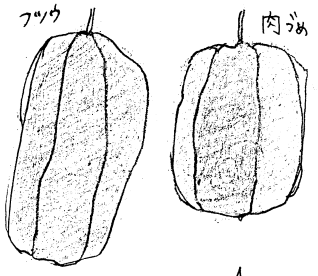
資料１

平成18年度教職総合演習　　野菜栽培個人記録

	ファイルNo.	9	グループ名		氏名	
	日付	6月8日	天候	晴れ	作業時間	30分くらい
作業内容	①野菜の観察 ②Tさんの説明を聞く※					
作物の様子						
感想など	※トマトは採れる前になると、カラスに食られてしまうので、カラスよけの赤or蛍光の糸をはる。 ナスは土が冷めたいので(早く大きくしたければ)下にワラをしくと葉の色もよくなるし、元気に育つ。など。 Tさんはいつもていねいに教えて下さるので分かりやすい。 トマトは肥料をやりすぎなので注意するコト。(葉がくるんとなってる) 最近、かぼちゃがかわいくて仕方がない。必死に枝をのばして下にひいてあるワラにからみついたりしている。 自分らの気づかんところで日々成長しているんだと実感した。					

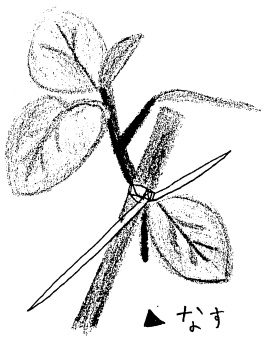
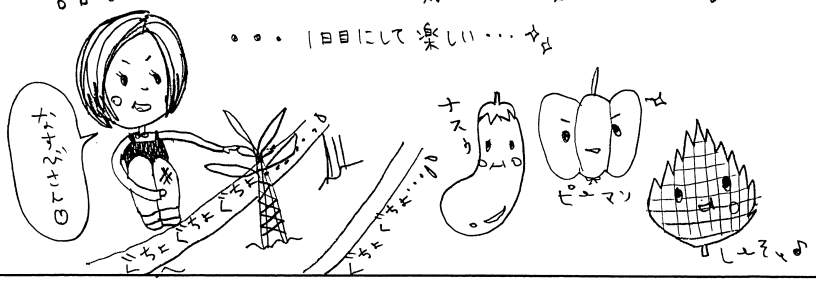
資料 2

平成18年度教職総合演習　野菜栽培個人記録

	ファイルNo.	18	グループ名		氏名	
	日付	7月10日	天候	晴れ	作業時間	1時間弱
作業内容	① 水やり 野菜1つ1つの苗にじょうろで土に水がたまるくらいたっぷりめに水をやった。 ② 観察 1つの苗に何個なっているかとか。					
作物の様子	なすび スーパーで売られているのに負けないような良いものになっている。  ※家で天ぷらにして食べた。 とても甘くて感激した。 これに自分の手も加えられていると思うと嬉しい。					
	 ピーマン 肉づめ用と普通のでは形がちがうのでおもしろい。					
感想など	梅雨らしく、ずっと雨だったので久しぶりの水やりだった。 最高気温が33度ある日だったので、4限おわりでもかなりの暑さで水やりするだけで汗だくになった。 きっとその暑さの中でずっとしている野菜はもっと暑いんだろうなと思った。 とうもろこしもどんどん大きくなっている。					

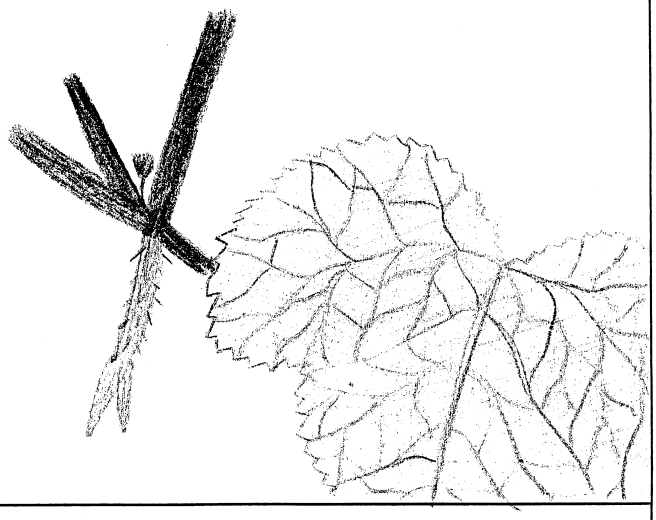
資料 3

平成18年度教職総合演習　野菜栽培個人記録

	ファイルNo.	1	グループ名		氏名	
	日付	5/12	天候	くもり	作業時間	20分くらい?
作業内容	前の日から次の日にかけて結構雨が降っていたので、何もできなかった☹ 水やりの心配もないし…↘ まわりの草を引いた♀					
作物の様子	 ▲なす					
感想など	昨日植えたところなのではっきりとした変化は見あたらなかったが、自分がすでに野菜たちに話しかけているという自分の気持ちの変化があった。 …1日目にして楽しい…☆  なすびさんの ちたくちたくちたく

資料 4

平成18年度教職総合演習　野菜栽培個人記録

	ファイルNo.	6	グループ名		氏名	
	日付	5/31	天候	晴れ	作業時間	2時間ほど
作業内容	きゅうりのネットはり トマトをビニールひもで引っぱったり…支えたり… ビデオ撮影					
作物の様子						
感想など	今日は授業を使ってみんなで畑仕事をした。 とても天気がよくて完全防備で挑んだ!! 私は主にトマト係をしたが、トマトを大きくさせるために、またあらたに 新技をTさんから教わった☆ それをほぼずっとしていたかな? 手がトマトのにおいになった。 トマトのシル? みたいなのがついて黄緑っ!! 最後Tさんがじゃがいもを掘らしてくれた。ごろごろいっぱい 出てきて楽しーーっ!! そして感動☆ 本当にありがとうございました m(__)m					